

Q 研究テーマは？

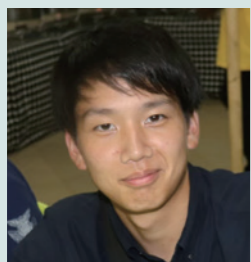
A 途上国の農業普及員について研究

農家に技術指導などを行う開発途上国の農業普及員について研究しています。普及員には、技術や知識などのスキルはもちろん、コミュニケーションの力も必要。その質を高めるための研究を行っています。今秋にはベトナムへ行き、農業普及員へのインタビュー調査などを予定しています。

Q 修了後の進路は？

A 農業専門の開発コンサルタントとして

来年4月から農業・農村開発専門の開発コンサルティング企業で働く予定です。まずはコンサルタントの新人としてさまざまな国・地域で多様な仕事に携わることで経験値を上げ、将来は日本のODA事業をしっかりと支えられる人材になりたいです。実践経験を積みながらチャンスがあれば博士号の取得も視野に入れています。



栽培技術だけでなく
社会学的アプローチの
重要性も学んだ

国際食料農業科学研究科
国際農業開発学専攻
博士前期課程2年
佐藤 善恭さん



短期留学でタンザニアに渡航した時の様子

Q なぜ大学院に進んだの？

A 農業と国際協力の専門性を高めたい

子どもの頃に世界の児童労働や食糧難の問題を知り、農業と国際協力を学ぼうと本学の国際農業開発学科に入りました。多様な専門性を持つ複数の先生から、幅広い視点で農業や世界の現状を学び、改めて国際協力の仕事に就きたいと決意。専門性を高めて修士号を取得するため、大学院に進学しました。

Q 研究室の雰囲気は？

A 専門的なテーマを英語で議論

研究科の授業は全て英語。学生の半数以上が留学生で、専門的な内容を英語で議論したり、各国の料理の試食会を開いたりする中で、語学力や異文化理解の力がつきました。理系の研究室が多い中、技術を扱う“人”に関心があり、社会科学が学べる農村開発協力研究室に所属しています。

Q 大学の魅力は？

A 各実習先で多様な農業を実践的に学べる

国際食料情報学部では1年次から実習が始まり、これまで神奈川県や静岡、岩手、北海道、長野など各地域ならではの農業や畜産を学びました。1年間オランダへ留学して有機農業を学び、3年次にはタンザニアの提携校に短期留学。多様な農業を学ぶと共に、語学力もアップしました。

先生から



途上国の農村で
活躍できる人材を輩出

山田 隆一先生
国際食料情報学部 国際農業開発学科 教授

世界的に貧困問題および格差問題が広がる中、農業を通じて開発途上国を支援し、国際協力の先駆的な人材の育成を目指しています。農村開発協力研究室では、農業経営学と農村社会学の分野を専門に、国内外の農業・農村開発協力に関心のある学生が集い、実践的な研究を行っています。

東京農業大学

国際食料情報学部 / 大学院 国際食料農業科学研究科



東京都世田谷区にあるメインキャンパス

Info 学校情報

取得可能な学位 学士、修士、博士

定員 学士150人、修士18人、博士2人
学費 入学金、授業料、演習費など合計152万3,800円（※国際農業開発学科 初年度納付金）。大学院に内部進学した場合、学費は実質半額（詳細はHP参照）

大学院の長期履修制度

大学院には、在学中にJICA海外協力隊に参加できる「長期履修制度」があり、4年間在籍が可能。修士の学位と現場経験の両方を手にすることができ、学内では「ニソクノワラジ」と呼ばれる。

修了生の主な進路先

- アルテア技研
- クボタ建機ジャパン
- トキタ種苗
- ナガイホールディングス
- 日本農業
- フナコシ
- 横浜植木
- 公務員（農林水産省）
- ウフル など

地球を救う学問、ここにあり。

1891年の創設以来、動植物の総合科学を扱う大学として、発展を遂げてきた東京農業大学。初代学長の言葉「稲のことは稲に聞け」は、観念論を排して実際から学ぶ姿勢を重視した実学主義の表れで、今も脈々と受け継がれる精神だ。

「日本と世界の食料・農業・農村問題の解決に向けて総合的・実践的に挑戦する」をモットーとする国際食料情報学部は、国際農業開発学科、食料環境経済学科、アグリビジネス学科、国際食農科学科の4学科体制で、人類共通の課題である食料、環境、エネルギーなど幅広い問題を地球規模の視点で学ぶ。学内で唯一、1年次から研究室に所属し、提携する国内外の農場や大学などで早期に実習や実験を始められる。世界各国の留学生と共に、日本や世界の農業を多様な視点で学べるのも魅力だ。

また、大学院国際食料農業科学研究科では、建学の精神「人物を畑に還す」に基づき、世界の食料・環境・貧困問題を解決するため、持続可能な農業の確立と国際協力の実践にアプローチする。自然科学、社会科学の両分野にまたがる学際的な研究により、農業開発や国際協力に関わる問題を論理的に考える思考力を養う。研究室以外にも、フィールドで学ぶ充実した大学院教育を展開し、世界の農業・農村の発展に貢献できるリーダーを送り出している。